

***** 事 *****

例会記録

六月例会 平成十四年六月二十二日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、助産婦教育の歴史の変遷——明治から現代

高橋みや子

一、相州小田原の医史片々

中西 淳朗

七〜九月 休会

十月例会 平成十四年十月二十六日

順天堂大学医学部八号館三番教室

一、定着村への歩み——戦後韓国のハンセン病対策

魯 紅梅

一、アメリカ医学図書館所蔵の日本関係医書などについて

酒井 シヅ

十一月例会 平成十四年十一月十六日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、十六世紀末から十七世紀初頭のスイス・バーゼルにおけるアナトミア

月澤美代子

一、国幹浅井篤太郎の医術開業免状下付願

樋口 輝雄

例会抄録

日本医史学会史資料供覧

岡 田 靖 雄

日本医史学会史をあむにあたり、医史学研究室の方がたのご協力をえて、資料をいくつかあつめることができた。一方、戦前の例会ではほとんどいつも、史料展示がおこなわれていた。史料をスライドでみせられるよりは、その物を直接にみるほうがずっと印象ふかいだろう。

そこで今回、あつめた資料を直接お目にかけることにした。発表者は医史学研究室の方がたとの連名にするべきだが、『日本医史学会総会百回記念誌』の酒井シヅ編集委員長の指示で、岡田の単名とした。

目録

1 有志医会『同盟簿』(二八七九年)(複写)

原本は広島県医師会館蔵(江川義雄先生のご好意による)

2 『中外医事新報』第一号(一八八〇年)

- 順天堂大学医史学研究室蔵
- 3 『私立奨進医会雑誌』(一八八九〜一八九二年)(複写)
 原本は東京慈恵会医科大学図書館蔵
- 4 先哲祭広告(一八九二年)(複写)
 『私立奨進医会雑誌』第四卷第一号より
- 5 『先哲祭』(一八九二年)山崎文庫蔵
- 6 第二回「医家先哲追薦会」(一八九三年)日本医史学会蔵
- 7 『医談』創刊号(一八九三年)医史学研究室蔵(複製本)
- 8 伊藤圭介書「醫家先哲追薦會」日本医史学会蔵
- 9 『医史料』第一〜七号(一八九五〜九六年)精神科医療史研究会蔵
- 10 『ジェンナー種痘発明百年期紀念文集』(一八九六年)精神科医療史研究会蔵
- 11 『日本医史』第三輯(一九〇九年)精神科医療史研究会蔵
- 12 『刀圭新報』創刊号(一九〇九年)山崎文庫蔵
- 13 『刀圭新報』第九卷第五号(一九一八年)山崎文庫蔵
 (暉峻義等編集の初号)
- 14 『医人』創刊号表紙ほか(一九一九年)(複写)
 原本は東京大学医学図書館蔵
- 15 『医人』第九号(華岡青洲号)(一九二〇年)(複写)(部分)
 原本は東京大学医学図書館蔵
- 16 第二次『医談』(一九二二年)山崎文庫蔵
- 17 日本医史学会機関『中外医事新報』第一一三一号(一九二八年)
 山崎文庫蔵、医史学研究室蔵(複製本)
- 18 『日本医師協会雑誌』第七卷第一号(一九三〇年)山崎文庫蔵
 (第二次『医談』改題)
- 19 山崎佐「医家先哲追薦会四十五年日本医師協会創立二十年記念特輯」(『日本医師協会雑誌』一九三六〜三七年別刷り) 山崎文庫蔵
- 20 『医譚』第一号(一九三八年)精神科医療史研究会蔵
- 21 『中外医事新報』改題『日本医史学雑誌』第一二八七号(一九四一年) 山崎文庫蔵、医史学研究室蔵(複製本)
- 22 『医譚』復刊第一号(一九五二年)精神科医療史研究会蔵
- 23 山崎佐理事長辞任・内山孝一理事長就任挨拶状(一九五三年) 精神科医療史研究会蔵
- 24 『日本医史学雑誌』第五卷第一号(一九五四年)日本医史学会蔵
 (戦後復刊第一号)
- 25 第五十九回日本医史学会総会案内(一九五七年)精神科医療史研究会蔵

26 日本医史学会関西西部会総会案内(一九五七年) 精神科
医療史研究会蔵

〔医譚〕創刊者中野操博士への慰労会)

27 『自然』第一五巻第八号(一九六〇年) 精神科医療史研
究会蔵

(グラビア・日本の科学者④「小川鼎三」撮影・菊
池俊吉)

28 『日本医史学会会報』第一号(一九六八年) 日本医史学
会蔵

(二〇〇二年一月例会)

また江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮し

深瀬泰 且

玄春の信仰

玄春は熱心な摩理支天信仰をもっていたので、その縁日にあたる亥の日には上野徳大寺に参詣にでむいた。ときには亥の日の前日にあたる戌の日にも、夜の参詣に出かけることもあった。玄春の母もこの信仰をもっており、その熱心さにおいてはむしろ母親の方にあつたかもしれない。元治元年からは信仰の対象が大国天にかわり、甲子の日にはかかさず浅草法養寺に参詣するようになって、摩理支天信仰はいささか熱がさめてしまった感がある。

妻おきせの暑氣中たりにさいしては、長男直次郎に浅草観音に護摩を焚きにはしらせたり、妻の実家にあたる江沢新兵衛とともに、川崎大師河原の平間寺に参詣におもむくこともあつた。信仰と行楽とはときに隣り合せの行事である。江戸時代においてはこのような傾向はけつして珍しいことではなかつた。

玄春の交際

添田家はどちらかといえば緒方洪庵をはじめ蘭方医との交際がおおい。「添田玄春日記」には伊東玄朴や大槻俊齋、手塚良仙、手塚良齋などの名がみえる。とくに大槻俊齋の長男玄俊と緒方洪庵の三女七重との結婚にあつては、添田家が大きな役割を果たしている様子がみえる。一方元康氏や野間氏との交際もみられ、蘭方医にかぎられていたわけではないことを物語っている。

江戸の華といわれる火事は、見舞という行為をとまなうことによつて交際の一環となる。日本酒を持参して火事見舞いや近火見舞いにかけているようすがかかっている。安政五年一月のお玉ヶ池種痘所の火災にあつては、自邸の近隣まで火勢が近づき塀を破壊して消火に専念したところ、幸いにして類焼はまぬかれた。この火災によつて種痘所は焼失し、その後泉橋通りに移転することになった。